

○コントラ「前衛」的コミュニケーションの〈現在〉

～2000年7月～ S・N

最近、朝日新聞の文化欄に吉本隆明の文章が載っている。

15年前「アンアン」でどこちなくモデルを演じて見せた時には、ビートたけしの酷評ほどひどくはないと思い、「海燕」誌上における埴谷雄高との論争は、固有名詞で語られる思想家同志の〈最後の〉一大パフォーマンスかもしれないと感じた。その頃〈獄中〉にいた松下昇が、共闘者からの差し入れ本に〈落書き〉して、双方の陥穽と薄暗い情況の基底をさりげなく浮かび上がらせている。

大学に依拠した学問ないし研究が吉本の〈敵〉であったのと同様に、大新聞に象徴される文化的〈公器〉も、彼の〈敵〉だと思っていたからだろう、朝日新聞への登場には、ヘーッ、吉本さんのメジャーぶりもとうとう漱石に近付いたのか、と最初は驚き、次第に気持ちが萎えた。気を取り直して6月25日の記述を読んでみた。

「前衛」や「知識人」に対応する概念として多用されていた「大衆」は、今回の選挙というテーマに沿って、「国家」や「政党」に対応する「国民」「民衆」という語に置き換えられている。噛み砕いた書き方なのに、何かずいぶん構えているように感じるのは、2千人程度の読者数と膨大な新聞の読者数の違いを意識した言葉の選び方からくる印象だろうか？

「ただの何でもない国民や民衆を自分の腹中に容れ」という言葉から、すぐに意識に交差してくるのは、著書『擬制の終焉』で出会った「コントラ「前衛」的コミュニケーション」という概念である。30年以上も前、口に入れる物だけに飢えていた、思想にも政治にも学問にもうとい、まして、他人に何か言うほどのことも持たぬ、名ばかりの学生だったのに何だかよく分かるような気がしたものだった。

『ここで、「前衛」的コミュニケーションの範囲はある限界線をつくり、その内での決議、アピールは、その外へ、大衆の外から大衆をその限界線のなかへ吸引するように行われる。

しかし、おそらくこの逆型のコントラ「前衛」的コミュニケーションがありうるはずである。それは、コミュニケーションを拒否する大衆の生活にむかって、その生活のほうへつき放し、その方へ組織化する方法である。しかし、もっと廻り道をしよう。

「前衛」的コミュニケーションの方法は、現在の「進歩」的末端にいたるまで採られている方法の範型である。これは、魚屋のおかみさんをオルグして母親大会につれてゆこうとする平和と民主主義者から、市民会議の地域的な結成をとく市民主義者まですこしもかわりない。』（前衛的コミュニケーションについて）

『どんな大衆の生活も、「前衛」党のために存在するのではなく、それ自身のために存在している。この単純な客観的な真理は、「党」の亡霊が横行するところ、「党」員の脳髓が過熱するところでは、しだいに影がうすくなる。また、どんな革命もただ労働者や大衆がその経済的な人間的な疎外をうちはらわれて、全人間的になるためにしか存在しないということもわすれ

られる。そして、この単純な真理はかれが「党」員同志でいちゃついているのではなく、いつも大衆の生活実体と無形の無言のコントラ前衛的コミュニケーションを果たしている以外には保てないのである。』（同上）

勝手にひとりで「逆組織論」と呼んでいた。安保闘争後の思想の死活を賭けた闘いに対して、私にできることは、なけなしの財布をはたいて本を買うことだけだった。そうすることでやっと学生であることを自己確認していたとも言えよう。喫茶店のボーイや新聞配達の間、たまに大学へ足を運んでも授業の雰囲気や内容からはじき出されている気分だったし、70年を視野に威勢よく語られる党派的な言葉に触れることがあっても、疎外感しか感じなかった。都会に憧れ、知的雰囲気に憧れて上京した炭坑労働者の脳天気な息子の一人は、閉山のおおりにくって喘いでいる親の苦労に目を伏せながら、自分の憧れに見合う拒否を返してくる都会の場末でうごめていた。理解のレベルはともかく、吉本の批評や詩篇に出会っただけでも、入社したばかりの会社を止めてまでやってきたかいたがかったと思ひ、彼の詩は、限りなく不安な世界で微かに鳴っている乾いた風の声であった。

「ただの何でもない」とは、歴史や文明によって変質しない人間の生活実体～存在様式の高度な抽象～比喩である。彼が見据えている〈敵〉の中心には、知的意匠を変えて複製し続ける「普遍口マンチズム」とも呼ばれる思想の型が存在した。大衆の存在様式から幻想的に上昇し、何らかの理念を大衆に注入することで出自の責任を果たそうとする発想は、究極的に全て支配様式に通じていく。吉本は、大多数の人間のありのままの生活実体こそが全ての価値の源泉であることに徹しない幻想性の有り様を引きずりだし徹底的に闘って見せた。情念の核には、戦中の天皇制や戦後のロシア・マルクス主義との苦衷にみちた体験が存在しており、解体すべきその知的上昇過程を自ら極限まで辿った体感に裏打ちされたものだったからだろう。

情念の深さはずっと不変であるとしても、問題は、その情念や獲得された真理性が〈1969〉年以降の状況をどのような位相で潜っているかということである。〈大学〉闘争とも呼ばれた情況性は、文明史的飽和点で、まず大学という特殊領域を媒介して現われた全支配領域から存在に加えられる新たな攻撃であり、察知する者たちによる抵抗～反撃である。〈ヒト〉の文明が突入している新しい段階の始まりとして把握しないかぎりその本質を開示しない。オウム的〈戦争〉や、低年令層の〈犯罪〉や、今後も生起し続けるであろう悲惨～は、その始まりとの関連において考察すべきである。

しかし、大学知識人を本質的に批判した吉本でさえ、現代社会の特殊領域における内部紛争としかとらえていない。本屋で立ち読みした『遺書』（?）においても「紛争」と記述されている。長年のファン意識からは、〈遅かれ早かれ一般生活大衆に合流していかざるをえない若者たちを現実の方へつき放し、自分達の必然を手放すことなく、闘争の根源的な意味を生活実体の方へ意識化せよ〉との逆組織論的挑発であると考えてきた。だがそれは、自分の声を聞いていただだけの深読みだったのかもしれない。埴谷との論争にも出てくる「しがない一売文業者」

という自己認識で切り抜けようとしても、思想の膂力に権威は付着するし影響力も増大する。思想的権威には節操ある者だけが群がるわけではない。権力を批判したことのある者はそのポーズを残したまま秩序の側に復帰したがる。裏目を持つ者たちにとっても、吉本は格好の抛り所である。あるいは、人は誰も存在感のある言葉に憑きたがる。影響力は時として、その持ち主の本質に敵対さえするものだ。自分は違うという意味ではない。全ての存在がそうであり得ることの体験の深みから、いかに優れた思想家でも視界から洩れ落ち逆転してしまう位相がある、と言いたいのだ。

大所高所から物言う時の危うさを誰よりも知っているはずの吉本が、資本主義の功罪の〈功〉に大衆の生活水準の希望を託さざるをえない革命の〈不〉可能性から、現代科学技術文明と高度資本主義を両輪として進む避け難い〈未来〉への楽天的評論家として登場し、前面の〈敵〉を撃ちながら、背面の〈敵〉に口実を与えてしまうのを見るのは無念だった。大衆の自浄能力への信頼とそれに対して自らの位置で果たすべき責任は、「ただの何でもない」大衆に等距離に開かれているわけではない科学及び経済の相関関係、その過剰事態への信仰に置き換わっているのではないか？ そうでないなら、そうでないことを願うが、40%を超える無（非）党派層の中の一人は、突き詰められた思想の行き着く自己解体こそが、表現主体の意図を超えたこの世界の表現であることを直観しつつ、不十分な自己解体を遂げた姿に若き日の詩句「思想の着地」を重ねたくはない、とあえて言う。

大学に限らず、本質を論ずるまさしく特殊領域（思想界、文壇、論壇等々）での論理的正しさも、頭脳の上で把握される客観性も、具体的な現実過程においては、過酷な「関係の絶対性」によって屈折を強いられ彎曲の力学に支配される。「関係の絶対性」とはまさに生のままの現実を客観化しようとする言葉の切迫であって、静止的な客観性の基準に還元されるものではない、というのが私の理解である。このことは、たとえ孤独な必死な闘いの成果であっても、変革への本質的な影響のみではなく、具体的な現実の局面では、権力を持つ位置で使用されることがあり、萌芽的な大衆の自立を圧殺する武器ともなりうることを示している。むろん、この責任は使用される側にあるのではないとも言えるが、〈真理〉がそのようにも流通するプロセスを繰り返さない真理性は変革されるべきである。〈大学〉闘争の本質はそのようにも現われたのだ。

井上陽水が、「～テレビではわが国の将来の問題を 誰かが深刻な顔をして しゃべってるだけでも問題は今日の雨 傘がない 行かなくちゃ 君に逢いに行かなくちゃ～」(傘がない)と歌い、中島みゆきが「～誰が悪いのかを言いあてて どうすればいいかを書きたてて 評論家やカウンセラーが米を買う 迷える子羊は彼らほど 賢い者はいないと思う あとをついてさえ行けば なんとかかなると思う 見えることとそれができることは 別ものだよと米を買う～」(時刻表)と歌う視線の先には、大学闘争後の情況性が、テレビ画像のはるか向こうまで、知性を例外なく相対化ないし風俗化していく時間が流れている。連合赤軍事件や～事件の対極で。

だが、この相対化～は大衆が自らの生活実体に向かって自立していく過程に対応しているわけではない。消費主体であることが同時に消費対象でもある循環の加速、目まぐるしい欲望の増殖と変遷によって、生活実感を果てしなく拡散させられて行く過程に対応しているのだ。本質論的に抽出される大衆の生活実体は、文明や制度にかかわらず、その領域自体に自足的であろうとする運動力そのものであり、外からのいかなるコミュニケーションも拒否して存在していると言いうる。大多数は、コントラ～であろうと「前衛」的であろうと、自らの不動の位置に引き入れ消費しうるコミュニケーションだけは望んでいるように見える。

この多数者の現われに対面して、もの言う専門家の位置で何かを伝えようとするなら、そして、その位置にこだわり続けるのなら、コントラ～も「前衛」的であるには違いないのだから、自己の「前衛」性を解体しつつ、コミュニケーション自体を消費として大衆に差し出すしかない。埴谷との論争後、ビートたけしに、「吉本さんは動くことで地位が下がったね。『アンアン』なんかに出て動けば動くほど駄目になっていく。オレはエライと思うけど、一般大衆はそう思わない、逆だね。」（朝日ジャーナル1985.7.19）と、逆説的に激励されているが、鬼の首でもとったように彼が言いたいのは、〈文化人もおいら達芸人も自分の思惑とは逆方向にどんどん大衆によって消費される点では同じだ、このごにおよんでそれを恐れちゃあいけないよ〉ってところだろう。それはいい。しかし、「おにぎりなんていらねえよ」って言う奴がどうして一人もいないんだろう」と六甲大地震の被災者を挑発したまでは分からないことはないが、「今の世の中で、死んでも国から物を受け取りたくないっていうのは、おいらと大江健三郎ぐらいのものじゃないか。」（新潮45—1995.3.1）と書いた当人が、ノーベル賞は拒否しなかった大江健三郎よろしく、国際的映画賞やなんかを欲しがったり有り難がったりしているようだから、ほとんどしゃれになっとらんやないか。「マスメ」を動く商売で重くなるうが軽くなるうが、自分の放言や才能に乗ってくれる目の前の聴衆～観客の反応以外のどっかに、商売内容の評価や公認をほしがるとは、被災者がおにぎりほしがるとより高級なことなんか？

7月9日の新聞で吉本は、選挙結果について「いらだたしいけど馬鹿じゃない」投票者たちの〈本音〉を、支持「政党」毎に想像～要約して見せた後、より多様な分化を示すに違いない無（非）党派層をも包括する論調で、「ちょっとでも身動きすれば破局がすぐ露呈するから、じっとして動かない国民の叡智の現われだと思った。ようするに、限度まで呑気な顔をしてみることを習い覚えた国民の成熟ぶりを見くびったら駄目だと思う」と結んでいる。安保闘争後、無数の呻吟を抱えこんで立ちつくし、孤独に提起された無形の無言のコントラ「前衛」的コミュニケーションは、40年後、成熟した「知識人」と成熟した「国民」の消費的交感を取り込む大新聞の文化欄に舞い降りているというべきだろうか？

「国民」や「有権者」であってしまふ位置で「投票」～「棄権」する者の眩きの一つは、「有権者」の枠の外に排除されている存在（在日外国人、未成年者、受刑者～）を包括しえない評価は、大衆のとらえやすい部分性に触れているだけではないのかということである。〈 〉氏

が獄中から既にやっているように、このような存在を「見くびり」、排除してなされてきた全選挙の無効性を「国家」に提起しうる度合いが、私の〈一票〉を幻想的に包囲して行く条件の一つであろう。投票するしないにかかわらず、「国民」の「成熟ぶり」さえ利用して既成事実が累積され、右往左往する政権の意図も超えて支配が貫徹されるメカニズムに、その〈一票〉はどこかで加担しまうのだから…。

この眩きは「ただの何でもない」に敵対する反動性の復権であるか？

最後に付け加えるなら、「ただの何でもない」大多数の存在様式を、自らが言葉を発する時の基底に抱え込む位置からさらに下降し、コミュニケーション不可能な、〈水際立った死線〉の向こう側の無数の死者や、まだ生まれない者たちを「腹中に容れ」て、現在の文明や自らの存在様式をとらえなおすこと、その転倒を媒介した時に見えてくるものを手放さずに、具体的現実過程～「関係の絶対性」の追求過程に生きよ、という〈大学〉闘争からの声を吉本の重層的非決定の声の対極にとらえ、受け止めておきたい。